

Pick up 一般社団法人雄勝花物語

花と緑の力でつながりながりを生み出し 雄勝の未来をみんなですく

雄勝花物語による低平地利活用及び交流人口拡大プロジェクト



雄勝花物語メンバーと、千葉大学園芸学部秋田県子研究室「花と緑の力で3.11プロジェクト」委員長の鎌田秀夫さん、地元ボランティアの皆さんから撮影した記念写真。雄勝花物語では、このように多くの人々とのつながりながりを育みながら活動している。

共感と支援の輪が造りだした 希望のガーデニング

雄勝花物語の運営する、宮城県石巻市雄勝町の「雄勝ローズファクトリーガーデニング」は、四季折々の花や樹木、ハーブで鮮やかに彩られた美しい庭園だ。「穴太梁積み(あのをしゅうづみ)」と呼ばれる技法で作られた石垣もガーデニングに一層の趣を添えている。

訪れる人を笑顔にする美しいガーデニングは、雄勝花物語の代表である徳水利枝さんが、津波で文字どおり瓦礫の町となった雄勝で、亡くなった家族を弔うために実家跡地に花を植えたことから始まった。たった一人から始まった取組だったが、やがて夫の徳水博志さんも共同代表として活動を支えることになった。そして被災地の緑化支援を行っていた千葉大学園芸学部の准教授・秋田典子さん、「花と緑の力で3.11プロジェクト」委員長の鎌田秀夫さんをはじめ、多くの人たちの共感と支援を得て、さらに活動は広がっていく。

震災後7年で、地元住民のほか、企業や大学、様々な団体から延べ8000人の

ボランティアが訪れ、今も多くのボランティアの協力によってガーデニングは進化を続けている。災害危険区域に指定され、今も土地の造成が続く地域にあって、ガーデニングの存在は復興に向けた希望となっている。

活動の自立化と 地域の復興に向けた挑戦

一方で、雄勝花物語ではいくつかの課題も抱えていた。例えば、これまでの活動資金は主に助成金により支えられていたが、復興・創生期間も終わりに近づく中、自主財源の確保が求められていた。

また石巻市雄勝総合支所では、ガーデニングを核にして、周辺の低平地で花と緑を活かした住民主体のまちづくりを進めていく「雄勝ガーデニング構想」が平成29年5月に策定されていたが、その実現の道筋は明確になっていなかった。

これらの課題に取り組み、活動の自立化と地域の復興に挑戦するため、専門家派遣型のハンズオン支援を受けることとなった。

支援を通じて再確認した 「つながり」の大切さ

ハンズオン支援では、収益事業の確立に向けて、雄勝花物語のメンバー、千葉大学の秋田先生と学生、鎌田さんのほか、雄勝で体験宿泊施設を運営するモリウミアス、復興庁、支援事業者が集まってワークショップを重ね、雄勝花物語に合った商品アイデアの洗い出しや試作品開発を行ってきた。また、交流会型研修での他団体との交流・対話を通じて、雄勝花物語の活動のあり方や大切にしていることを改めて見つめ直した。そうした中で徳水ご夫妻が感じたのは、自分たちの活動の原点である「つながり」の重要性であったという。

「はじめは、ガーデニングの運営のために売上を立ててはいけないうこととが頭にあって、とにかくどうやって利益を出すかを考えていたんです。自分たちはそういうことは苦手だし、お金をもらうことへの抵抗もあって、なかなかうまくいきませんでした。でもハンズオン支援や研修の中でたくさんの方の外部の方とお話して、『何もなくなってしまう



徳水利枝さん(左)・博志さん(右)

雄勝の町をきれいにしたい」、「人がつなげる癒しの場にしたい」という当初からの想いを伝える大切さに気づくことができました。商品に「つながり」に感謝する想いを込めることで、結果として利益はついてくる。そういう考え方で進んで大丈夫だよ、とみなさんに背中を押してもらうことができました。」(利枝さん)

「「つながり」を大切にできてきた自分たちの取組が間違っていないかったとわかって、自信になりました。今までに築いてきた「つながり」が、きっとこのガーデンを持続可能なものにしてくれると思えるようになりました。」(博志さん)

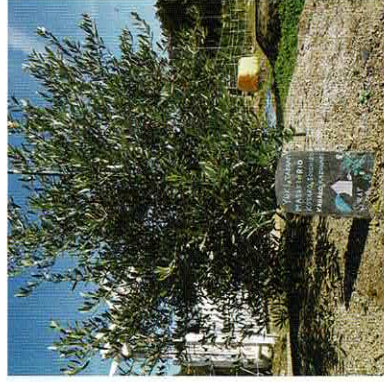
「つながり」を大切にしたい新たな試みも既に始まっている。その一つが、宿泊施設モリウミアスと連携したモニターズアー。ツアーでは、参加者にガーデン造りに参加してもらうとともに、語り部の対話や、郷土料理の昼食、雄勝の女性たちとの交流、ハーバリウム制作体験な

ど、雄勝をより深く知り、つながるプログラムを提供。参加者からも、雄勝の女性たちをはじめとした協力メンバーから面白い反応が得られ、利枝さんは手応えを感じているという。今後、雄勝花物語の歩みと想いを伝える動画も作成し、さらに共感の輪を広げていく予定だ。

雄勝ガーデンパーク構想の具体化

ハンズオン支援では、石巻市雄勝総合支所とともに低平地の活用を目指す構想の具体化も進めてきた。雄勝ローズフアクトリーガーデンを中心に、パークゴルフ場や研修農園、花や果実の摘み取り農園、花と緑の広場などによる活用の計画を具体化することができた。一部エリアについては市の予算を確保し、計画実現に向けて詳細設計も進めている。

博志さんは、構想の具体化に向けて議論を重ねてきたことで、「行政との連携も深まった」と感じているという。今後



「北限のオリーブ」生育の様子

も住民、地元団体と行政の連携のもとで、構想の実現に向けた取組を進めていく考えだ。

今後に向けて～まちを未来に引き継ぐために

今年度のハンズオン支援を通じて見出した活動のあり方を大切にしながら、利枝さんは雄勝の低平地をさらに人の手で蘇らせていく活動を今後も続けたいという。ガーデンの外にもラベンダーなどで彩られた空間が広がり、そこにたくさんの人が集い笑い合う未来を思い描いている。

博志さんはさらに、ガーデンと低平地の利活用によって雇用を生み、持続可能なまちづくりにつなげることを目指している。ガーデンの隣には、オリーブ畑が広がっているが、順調に生育すれば、2年後にはこれを「北限のオリーブ」として販売できる見込みだ。雄勝の地で人がつながり、なりわいが営まれる未来に向けて、雄勝花物語の挑戦は続く。



制作体験・購入できるハーバリウム



雄勝ローズフアクトリーガーデンの様子